夕張に学ぶ

1月31日、私は北海道夕張市を訪ねました。夕張の現状や再生に向けた取り組みを視察すること、北海道庁では、夕張破綻までの経緯や支援策、昨年廃線になった「ちほく高原鉄道ふるさと銀河線」の廃止の経緯や地域交通の現況を聞くことなどが目的でした。

夕張の破綻は、加西市（民）にとって対岸の火事ではありませんし、多くの全国の自治体に共通する問題です。夕張市の財政再建計画や北海道の調査報告書を読み解くと、加西市の抱える諸問題を解決していく糸口が見つけられるように思います。

石炭産業華やかなりし頃、夕張市の人口は10万8千人でしたが、今は1万2千人で、加西市の4分の1です。夕張市の面積は加西市の約5倍で、その中に小学校が7校、中学校が4校あり、そこに児童・生徒は各々407人、240人（平成18年度）が学んでいます。これを小中各々1校に集約統合する計画が進んでいます。

学校の統廃合については、破綻以前から検討されており、平成17年度に「夕張市における小中学校の適正配置に関する答申書」が出されています。この点で夕張市では、加西市よりも早く学校の統合問題を具体的に考えられていました。今後、夕張市民病院は、わずか19ベッドの診療所となります。しかし、万一急患が発生しても僅か10分ほどで札幌の高次医療機関（大学病院）まで搬送されるドクターヘリのシステムが、平成17年からスタートしており、その点でも、加西市は参考にすべきだと思います。夕張は、全国で最も高齢化率の高いまちで、市民の40%が65歳以上ですが、高齢者医療費を増やさないために、予防医療や在宅診療を積極的に進めています。全員70歳代というボランティアグループが積極的に活動したり、市民が新たにＮＰＯ法人ゆうばり観光協会などを設立して、ふるさとを守っていこうと立ち上がっています。全国で活躍する夕張出身者、夕張に縁もゆかりもない人達からも支援の輪が広がっています。住民が雪下ろしボランティア隊を結成するなど、行政に頼れない今、自らまちづくりにかかわるようになってきたようです。残念ながら加西市には、ＮＰＯ法人はまだ存在していません。

加西市が抱える借金は、一般会計の他病院・水道・下水道の各特別会計で約576億円、支払義務のある利息約123億円を加えると699億円あります（平成17年度末）。また、実質公債費比率は19.0%で、許可がなければ、新たな市債発行ができない水準にあります。加西市では、これまでも助役・教育長の公募をはじめ、各種委員は原則公募として、市民参画による改革改善に取り組み、外からの視点で市役所を変えてもらおうとしています。加西病院の医師や看護師など医療スタッフはじめ、社会人職員なども公募中です。これには、加西市民はもとより夕張市職員なども応募できますが、夕張市職員を特別枠で受け入れるものではありません。

夕張に学ぶことは沢山あります。夕張の教訓を、自治体経営や地方自治にしっかり生かさなければなりません。まず、財政や行政の徹底した透明化です。夕張市は赤字を一時借入金で穴埋めして隠してきました。行政は政策や財源などをこれまで以上にオープンにし、分かりやすく市民に説明する義務があります。夕張市議会が赤字をチェックできなかったことも問題を大きくしました。市民が行政や議会に無関心でいると、そのつけは市民にはね返ってくるのです。

夕張を立て直せるのは、結局、市民しかいません。「夕張、頑張れ」のエールを送りながら、見守っていきたいと思っています。夕張市が行ってきたような粉飾行為を見破るためにも、一般会計だけでなく公営企業会計や第三セクター・公社まで含めた連結の公会計が不可欠です。定年退職などで、時間に余裕のできた民間経験者が核になって住民のネットワークが活発になれば、市役所にも緊張感が生まれ、改革はもっと進むと思っています。

今回、私は夕張を激励するつもりが、夕張市民の姿勢を見て、逆に元気をもらったような気がします。

（市長）

夕張市長にエールを送る